

---

# 勇者への道

翔吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者への道

### 【コード】

N0700B

### 【作者名】

翔吾

### 【あらすじ】

高校2年の柳沢翔は授業中寝ているといつの間にか異世界へと旅立っていた。そこで勇者になってと頼まれて・・・

## 第1話：旅立ち

手に持たれているチョークが黒板の上を流れるように動いていく。書き終えるとこちらに振り返り、書かれている内容を説明し始めた。中国の歴史がどうのこうの言っているがはつきしいってどうでもいい。

授業なのだからどうでも良くはないがやっぱりどうでもいい。

今は多分世界史の授業だろう。担当の先生の名前は・・・忘れた。

まあこの物語にはどうせ関係ないので別に良いか。

それにしても授業ってやつは暇で暇でしようがない。

いや、授業に限らず最近はず～～と暇だ。

あんまり暇なもんだから一日の半分は寝て過ごし居るかもしれない。しかもそのうち半分は学校で寝ている。

現に今もあと数分もすれば眠りにつくだろう。

おかげで成績はいつも半分以下なのだが。

それでも高校に入ってから2年間、

まだ一度も赤点と取ったことが無いのは我ながらやっぱだ。

それにしても眠い。段々と意識が・・・。

やはり睡魔には勝てぬ。それじゃおやすみなさい。

身の回りに違和感を感じ目を覚ます。

まず目に入ってきたのは黒板・・・ではなく竹林だった。

陽が射し込んでおり、竹がその陽を反射してキラキラを輝いている。

まるで竹取物語のお爺さんが金色に輝く竹を斬るシーンのような場所だ。

夢でも見ているかと思ったが感覚的にこれは現実だと思われる。

試しに手の甲を抓ってみたが、やはり痛みを感じた。よってこれは現実である。

しかし何故俺はこんなところに居るのであるのか？

寝ている間に勝手に自分の体が歩き出してここまで来たのだろうか。はたまた身代金目的で誘拐に遭ったのだろうか。

そんな在りえない事を考えていると、背後から枯れ葉を踏み分けながら進んでくる足音が聞こえてきた。瞬時に音の方へ視線を向けるとそこには青年が居た。

年齢はおおよそ18歳ぐらいだろうか。

漆黒のさらさらとした髪にどこまでも澄んでいるような漆黒の瞳。誰が見ても美形だと答えるであろう。服装は黒の学ランっぽいものを着ている。

俺と同じ高校生だろうか。しかし何故こんな所に？

その青年は、枯れ葉の上に座っている俺の目の前まで来ると足を止めた。

「こんにちは」取りあえず俺は挨拶を試みる。

青年は柔らかく微笑むと「こんにちは」と挨拶を返してきた。何て透き通った声なんだろう。まさしく美声。

「え〜っと。此処ってどこ？」

自分言っというてなんだがこれじゃまるで迷子みたいだな。

「趙北チウペイです」青年はそう答えた。

「・・・それって日本？」

趙北なんて言う土地が日本にあるとはあまり思えない。

どちらかという中国っぽい感じがする名だ。

「色々と疑問があると思いますので、説明いたしますね」

どうやらこの青年は俺が此処にいる理由を少なからず知っているようだ。

しかしこいつ誰なんだろう。

「まず始めに私の名前は西園寺サイオンジ 零レイと申します。」

名乗られたらこちらも名乗るのが礼儀ってもんだらう。

「俺の名前は柳沢ヤナギサワ 翔ショウだ。」

「先ほどの質問ですが、此処は日本ではなく真呈国シンテイコクと云います。

そもそもこの世界はあなたが住んでいた世界とは異なった場所

す。

地形は同じですが住んでいる人や文化、歴史などが異なっています。

あなたが住んでいた世界を表と例えるならばここは裏、といった感じですよ。」

「はっ？」

思わず声が漏れてしまった。

突然ここが異世界です何て言われてもそうそう信じれる物ではない。「信じられないと思いますよがこれならどうでしょう」

そういうと零は右手をスツと挙げた。

「燃えよ火炎！」

その言葉を発した途端、挙げていた右手の手のひらから拳ほどの大きさの炎の塊が現れた。

ライターで作ったような安っぽい炎ではなく、

力強いのに綺麗で自然の力によって生みだされたような炎。

「ええ！まじかよ」思わず感嘆の声が漏れる。

その炎の塊は手の上でまるで生き物のようにゆらゆらと揺れている。

「これで信じてもらえますよね？」

さすがにこれは信じるほかないだろう。

「え、ええ。信じます。」

零はその言葉を聴くとまた微笑んだ。

右手にある炎の塊を躊躇することなく握るとそれは跡形もなく消えた。

「炎なのに熱くないの？」

「自分自身から生まれた炎ですから熱くは在りませんよ。でも他の人が触るとやけどするので 気をつけてくださいね。」

「なるほどね。あれって魔法だよな？」

「さっきのは攻撃魔法の火炎属。あの程度の魔法なら訓練すれば誰でも出来ますよ」

「へえー。誰でもねえ」

誰でもつてことは俺も出来るんだろうか。信じられん。けどメチャクチャやってみたい。

「それでは本題に入りますね。」

「はい」

「あなたは今日からこの国の勇者になつてもらいます。」

「はっ？」本日何度目かの驚きである。

運動神経も頭脳も人並みのどこにでも居そうなこんな俺が勇者になれるはずがない。

こんな俺が勇者なら、零、あんたは神様レベルだよ。

「詳しい説明は街に戻りながら話しますね。ここは魔物が出る可能性が在りますので。」

魔物つてよくRPGゲームなんかに出てくるあいつか。

おいおい、さすがにそれはやばいだろ。面白そうだけど。

「それでは街まで案内致しますので、付いて来て下さい。」

## 第1話：旅立ち（後書き）

初めて書いた小説です。目標は取りあえず完結・・・

## 第2話：移住

近年魔物達が凶暴化し、人や街を襲うようになった。

調査の結果、何者かが魔物達を操っている事が解明された。国総出で防衛に試みているが形勢は悪くなる一方。

そこで已む無く異世界に住む者に助けを求めることとなった。なぜ魔法も使えない異世界の者を助けを求めるかという、異世界から来た者はこの世界に住む人々に比べて遥かに成長能力があるためである。

そういうわけで俺はこの世界へと連れて来られた。

何故俺が選ばれたかという、ただ単に俺が暇そうだったかららしい。

だから俺はこれからこの国で戦闘訓練を受けることになる。

以上が零から説明された内容だ。俺も今一理解できていないため説明が乱文で申し訳ない。

まあ要するに訓練して強くなり、魔物達を操ってる者を倒せばいいらしい。

歩き出してから一時間ほどして、ようやく街の正門に辿り着いた。サッカー部に一応所属はしているものの、さすがにこれは疲れた。

街の周りは数メートルは在ろうかと思われる頑丈そうな防壁に囲まれていた。

おそらく街に魔物の進入を防ぐためだろう。

門の両側には銀色の鎧を被った兵士と思われる人が立っていた。その兵士の手には槍のような物が握られている。

零はその兵士に近づき、「三言葉を交わすと、こちらを向き手招きをする。」

その指示に従い歩み寄ると、そのまま街の中へ通された。

零の後ろに付いて歩くような形で街の中を進んでいく。

街の中にある建物のほとんどはレンガと木の板で出来た屋根といった感じだった。

今までの人生でこのような建物を間近で見ることなど無く、改めて自分が異世界に居ることを感じ取った。

しばらく街の中を進んでいくと、城らしき物が見えてきた。どうやらあそこへ向かっているようだ。

外装は白いレンガで出来ており、中央に大きな塔が一つ。その両側に一回り小さい塔がある。

中央の塔の天辺には旗が風に揺られながら建っている。おそらくこの国の紋章か何かだろう。

「この城って何？」  
前を歩く零の背中に疑問を投げ掛けた。

「この城は真帝国の王族の者が住んでいるんです」  
正面を向いたまま答える。

「零は王族の者なの？」  
「いいえ。私は秘書みたいな者です」

「ふん。秘書ねー」  
城の門には街の門にもいた銀色の鎧を被った兵士が両側に居た。

零はその兵士達とまた二、三会話を交わすと城の内部へと進んでいった。

俺もその後を追って城の中へと入っていく。  
城の中は床には赤いじゅうたんが敷かれ、壁には肖像画や花瓶などで飾られたいた。

素人の俺でも高価なものであることが分かった。

零は中央にある階段を上っていったので、後を追った。  
階段を上り終えるとそこには複雑な彫刻が彫られた大きな扉があった。

やはりそこにも兵士が二人居り、零はその兵士と言葉を交わすと、その兵士達は大きな扉を二人がかりで開けた。

扉の向こうは大きな部屋があり、奥にはイスに誰か座っているの

が見て取れた。

雰囲氣的にあれば王様だろうか。

零はイスに座っている人物の前まで歩み寄るとひざまずいた。

「陛下、異世界の者をお連れ致しました。」

「ご苦労さん、零」

意外に言葉遣いが軽いので啞然とした。

よく見るとそれっぽいい格好はしているものの、歳は若く20代前後だろうか。

「それで名前は？」

「俺の名前は柳沢 翔だ。えーっと、陛下って呼べばいいのかな？  
言ってから気付いたのだが、俺もやはり敬語を使うべきだったのだ  
ろうか。」

だが基本的にそういうまどろっこしい事は苦手だ。

「何だっつていいよ。どうせこれから訓練とかであんまり遭わないだ  
ろうし」

うわぁ 何かその言い方もつく。

だが決して言葉には出さないとこころが俺の良い所。 別名チキンハート

「それじゃ訓練頑張っつてねー」

そう言い残すと奥の部屋へと消えてしまった。

「あんなのが陛下なんて信じられん」

「性格はあの通りですが、政治に関してはこの国でもトップレベル  
の才能ですのぞ」

そうは言われてもやはり信じられん。

「それでは今日からお泊りしてもらおうお部屋へ案内しますね」

そういつて案内された部屋は寝室、リビング、バスルームと何故  
かキッチンの備わった部屋だった。これは自分で食事を作れという  
事だろうか。

「キッチンがあるのは何故？」

まさかとは思うが一応聞いておくと案の定、

「もちろん自分の食事を作ってもらつたためです」

やっぱりか。まあ一応こう見えても人並み程度には作れるので問題は無いのだが。

「本来なのこちらで用意するのですが、何しろ食文化が違いますので」

言われてみれば確かにそうだ。虫の丸焼きなんか出てきた日には昇天してしまうだろう。

「では次に訓練場へ案内いたしますね。」

「訓練はいつから始めるんですか？」

「今からです」

「はいよ……。」

### 第3話：剣術

大きさは学校の体育館程度の大きさで、壁のほとんどは分厚い鉄で出来ており、所々に傷が見える。

ここが今日から訓練する場となるのである。

「まず始めに剣術のコーチを紹介します。」

功力 クヌギシノブ 忍先生です」

そう紹介された人物は、引き締まった筋肉に長髪を後ろで結わえており、

年齢は30代半ばぐらいだろうか。

「君が噂の異世界の住人か。今日からよろしく頼む」  
張りのある力強い声である。

「柳沢翔だ。こちらこそよろしく」

「まずは訓練に使う剣を渡しておく」

そういつて腰に差してあつた剣を鞘ごと渡された。鞘から剣を出して眺めてみる。

刃の表面が光沢しており自分の顔が鏡のように映し出されている。

「そいつは練習用の剣だから安物だ。」

よし、さっそく俺の攻撃を防いでみる」

まだ何にも教わってないのにいきなりですか。

そんなことを思っているうちに功力は鞘から剣を抜いた。

「おい、ぼさつと立っていると体が真つ二つになっちまうぞ」

訓練なのに真つ二つにされたんじゃ堪ったものじゃない。

慣れない剣を両手で支え、見よう見まねで構える。

「しっかり防げよ」

そう言い放つと高く振り上げていた剣を俺に向かって振り下ろした。風を切り裂きながら襲い掛かってくる剣を何とか両手で握っている剣で受け止める。

剣と剣が触れ合った瞬間に鳴る高音の金属音が耳を伝い脳に響く。

功刀は剣を受け止められるとすぐさま構え直しに今度は横から斬りかかった。

再び襲い掛かってくる剣をギリギリのところを受け止める。

「ま、このくらいは出来て当たり前だな」

いや、結構きついからね。

「だがこれはどうか」

そういうと三度襲い掛かってきた。

しかし今度は剣を振る速度が速く、持っていた剣を弾き飛ばされてしまった。

剣は床の上をすべるように転がっていく。

「それで防げまい」

功刀は剣を俺の腹へと向けて突き刺す。

だがそう易々と刺されるわけにはいかない。

向かってくる剣をギリギリのところまで横に避ける。

しかし剣は予想以上に早く、横腹を服と一緒に斬られる。

だが幸い傷は浅いようだ。しかし訓練なのに本当に斬られるとは危なすぎる。

「あれを避けるとはなかなかの反射神経だな。じゃこれはどうか」  
そういうと剣を水平に振り切った。

今度もギリギリのところをバックステップで避ける。

避けられるのを予想していたように今度は縦方向に剣を振り下ろしてきた。

深い！避けきれない！

瞬時にそう判断すると振り下ろされた剣を

頭部に当たる寸前のところで両手で挟むように受け止めた。

いわゆる真剣白刃取りである。

これには功刀も驚いたが、それ以上に自分が驚いた。

まさか本当に出来るとは思っても見なかった。

「なかなかしぶとい奴だな。しかし・・・」

功刀は剣を掴まれた状態のまま腹に向けて膝蹴りを放った。

膝は見事に腹に食い込んだ。

「ぐはッ」

痛さに思わず剣を放し、その場にうずくまってしまふ。

そのチャンスに功刀が見逃すはずもなく、

うずくまっている俺に剣を振り下ろした。

痛さに耐えながら何とか横に転がり剣から逃れる。

続けざまに功刀は剣を振り下ろす。

その攻撃も横に転がりながら避けると、

すぐさま起き上がり跳ばされてしまった自分の剣の元へと走る。

滑り込むようにし自分の剣を掴むと功刀が居る方向へと構えた。

功刀は剣を構えることなくゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる。

「さて、次はどうかな」

不意に剣を構えたかと思うと、物凄い速さで襲い掛かってきた。

まるで北斗百裂拳の剣バージョンのようである。

そのあまりの速さに付いて行けず、時間に比例して体中に切り傷が増えていく。

「まだまだー」

そのうち速さに慣れてきたのか、だいぶ攻撃を受け止めれるようになってきた。

刃同士がぶつかり合うたびに金属音が鳴り響く。

体はまるでボロ雑巾なみに切り刻まれてしまっていた。

「ハアハアハア」

息も上がり、だいぶ体力が消耗しているようだ。

一方功刀は余裕の表情で剣を振るっている。

「そろそろ終わりにしますか」

そう聞こえた瞬間、目の前に居たはずの功刀の姿が消えた。

その代わり首には本来は冷たいはずだが、

何度も剣同士がぶつかり合ったため熱くなった刃先が突きつけられていた。

ぜんまい仕掛けのロボットのようにゆっくりと視線を自分の背後へ

と向ける。

そこには先ほどまで目の前に居た功刀の姿があった。

いつの間に背後を取られたのだろうか。はつきし言って人間の動きじゃないな。

「勝負あつたな。しかしなかなか見込みがありそうだ」

そういうと面白い玩具でも見つけた子供のようにニヤリと笑った。

## 第4話：魔術 1

「ハアハアハア」

あれから数時間ぶつ通して剣の訓練を受けているため、体中傷だらけのうえ、出血のせいで意識が朦朧としはじめてきた。

「もう、限界だ・・・」

そのまま床にひざまずいてしまった。

「ふう、俺もだいぶきつくなってきた事だしそろそろ魔術の方に移るとするか。」

ほら、移動するから俺の肩に掴まれ」

肩を貸してもらいどうにか立つとそのまま部屋から連れ出された。しばらく歩くとさつき居た訓練場と似たような部屋へと着く。

だがさつきの訓練場とは違いこの部屋の壁には紋章やよく分からん文字などが描かれている。

「金城さーん、急患」

功刀は部屋の奥の方へと叫んだ。

「はいはい」

奥の方から明るい声で返事がくる。

その後、20代ぐらいの女性が現れた。

金髪の長髪に白く透き通った肌、それに整った顔。綺麗な女性だ。

「あちゃー、ずいぐんと派手にやられたね、君」

その声を掛けながらこちらに歩み寄ってくる。

「それじゃ、さっそく治療するわね」

両手を挙げ、手のひらをこちらに向ける。

すると、俺の体が温かい光に包まれるように光り輝く。見る見るうちに体中の傷が治っていくのが分かる。

ついでにボロ雑巾のようだった服までもが元通りに鳴っていく。

「よし、これでいいかな」

試しに腕を回したりしてみたが、まったく痛くない。

「おお、治ってる。ありがとう！」

「いえいえ、どういたしまして」

そしてやさしく微笑みかけた。

「翔、その方が今日からお前に魔術を指導してくださる金城  
さんだ」

カネシロサツキ  
泉月

そういつて功刀が紹介した。

「そうなんだ。俺は柳沢翔。よろしく」

「こちらこそよろしくね。翔君」

「なかなかしぶとい奴だから多少は無理しても大丈夫だろう。

ビジバシ鍛えてやってくれ。それじゃ後は頼んだぞ」

そっぴい残すと功刀は部屋を後にした。

「それじゃまずは魔法について簡単に説明するわね」

魔法は大きく分けると、通常魔法・上位魔法・召喚・神聖語の4つ  
が存在

通常魔法には攻撃魔法と補助魔法の二つが存在

攻撃魔法は火炎・水氷・電気・大地・光陰、それと無

補助魔法は移動・治療・強化・通信、など

上位魔法は宇宙魔法・次元移動・古代魔法など

召喚とは人にはそれぞれ召喚獣が一体存在しており、それを呼び出  
す魔法

神聖語とはこの世に存在する神々と意思を交わし、その神の能力を  
引き出す魔法

魔法の強弱は主にその人の精神力によって左右される。あと集中  
力も必要とされる。

だから弱気な人などは魔法が苦手な事がほとんどだ。

「まあこんな感じかな。分かった？」

「はあ、まあ一応」

実際そんな事を一気に言われても頭がオーバーヒートしてしまう。

「百聞は一見にしかずって云うから、まずは一番簡単な念動力からやってみましようか」

念動力ってあの手を使わずに念じることによって物を動かす能力のことか。

「その剣ちよつと借りるわね」

腰に差してあつた鞘から剣が独りでに動き出し、まるで羽が生えたかのように宙を舞う。

「おおっ！」

それにはやっぱり驚いた。

「心の中で強く“動け”って念じればいいのよ。簡単でしょ？」  
簡単でしょ？ってそんなに簡単にいくわけ無いでしょ。

「いやー、ちよつと」

「それじゃこの剣を翔君の頭の上に移動させてっ」と

剣の刃先がちよつと俺の真上に来るように動く。

俺は無視ですか……。

「それでこの剣が落ちないように強く念じてね。じゃないと頭に角が生えちゃうよ」

角って……。要するに落ちないように念じてないと剣が俺の頭にグサリってか。

まったく素人にさせるような訓練じゃないよな。

「徐々に私は力を弱めていくからね。はい、スタート！」

こんなところで死にたくないので兎に角念じる。

落ちるな！ 落ちるな！ 落ちるな！ 落ちるなよー。

「はい、私はもう念じてないからねー。うん、まだ生きてるね」

頼むから落ちないでくれー。俺はまだ死にたくないんだ。

「その状態であと数時間は耐えといてね」

何かものすごく恐ろしい事が聞こえたような気がするが集中、集中。

「それじゃ私はおやつタイムとしますかね。」

今日は大好物のモンブランケーキなんだよねえ。

あの甘いマロンクリームが何ともいえないおいしさを奏でてくれ

るのよ。

もう考えただけで堪んない。私が食べ終わるまでに剣を落とさないでよ」

云われなくても落としませんから。

それからだいたい一時間ほど経過すると

ようやくおやつタイムが終わった金城が話し掛けてくる。

その頃になると大分精神的に疲れが見え始めてきた。

「よし、大分慣れてきたと思うから、今度は私が投げるナイフを念動力で止めてね。」

ああ、剣はそのままの状態だね」

「それはちよつと難易度高すぎじゃない？せめて剣は・・・」

「よし、それじゃ早速いくよー」

また俺は完全に無視ですか。俺の意思はいったい何処へ？

「まずは一本ずつね」

そういうと腰に差してあったナイフを俺の胴体向かって投げつけた。それを必死で止まれと念じる。剣の方も落ちないようにしないといけないので、

かなりの集中力を要するが、何とか一本目のナイフは速度を落とす、そのまま重力に従い床へと落ちていく。

「一本目は成功ね。それじゃ2本目いくよー」

先ほどと同じようにナイフを投げってくるのだが、

前回よりも若干速度が上がっているような気がするのは気のせいだろうか？

2本目も無事に止めることが出来た。

「よし、3本目いくよー」

そういつて投げってくるナイフは一本目より明らかに速い。

だが、そのナイフも無事止めることに成功する。

そのような感じでどんどんスピードアップしてくるナイフを止めていく事、100本目

「レベルアップして次から本数を増やしていくね」

そういうと今度は腰からナイフを抜き出し、投げてくる。

2本と難易度が上がったうえに、速度がバラバラに飛んでくる。これも何とか止めることが出来た。

今気づいたが、金城はいつたい何本のナイフを腰に所持しているんだらうか。

「よし、次は3本ね」

やはり速度がバラバラなナイフが飛んでくる。

そのような感じで増える増えるナイフ、最終的には絶え間なくナイフが飛んでくる。

「なかなかやるわねー。でもそろそろ精神的に限界だと思うからラストに私が念動力で飛ばすナイフを止めてみてね。それじゃいくよー」

腰にささっていたナイフが独りでに宙に浮き、こちらへとゆっくり飛んでくる。

それを止まれと念じるがさきほどのように簡単には速度が落ちない。いや、むしろどんどん速度を増してこちらへと向かってくる。

頭の上にある剣の事も完全にナイフの方へと集中できない。

ナイフは刻一刻と俺の眉間へと進んでいくが俺にはそれを止めることができない。

そしてついにナイフが俺の眉間へと触れる。

触れても尚、ナイフが速度を落とす事なく眉間へと食い込んで行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0700b/>

---

勇者への道

2011年1月25日03時39分発行